



Title	論拠付け(argumentation)を指向するSD
Author(s)	堀江, 剛
Citation	臨床哲学のメチエ. 2001, 9, p. 23-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7406
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

9月5日(水) ホルスト・グロンケ氏講演

「ネオソクラティック・ダイアローグの理論と実践」(ドイツ語)

9月6日(木) 臨床哲学コロキウム「現代社会と実践哲学」

提題者:ベアーテ・リティヒ(ウィーン高等研究所) 霜田求(大阪大学・医学部) 稲葉和人(京都大学) 山中浩司(大阪大学・人間科学部)

9月8/9日(土日) ソクラティック・ダイアローグ、ディレンマ・トレーニング

以下はこの「SD週間」の催しのうち、SDとディレンマ・トレーニングの様態についての簡単な報告である。なお、講演会とコロキウムの報告は『臨床哲学』第4号(2002年)に掲載される予定である。

SDとディレンマ・トレーニングは英語で行われた。日本ではあまり耳にしたことのない英語による実践で、当初は危惧がないでもなかったが、それでもおおむね支障なく進行したことについて、グロンケとリティヒの両氏、そして参加者各位の意欲と能力に敬意と感謝を表したい。

論拠づけ(argumentation)を指向するSD

堀江 剛

9月8日、大阪大学待兼山会館において、ドイツからやってきたSD理論家、ホルスト・グロンケ氏のファシリテートで一日だけのSDが行なわれた。テーマは"How to deal with feelings?"、参加者は臨床哲学研究室の学部卒業生、院生、大学院卒業生、留学生、大学教員、看護学教員など七名の多様な顔ぶれであった。筆者はオブザーバーとして参加した。対話の内容については参加者のプライバシーに関わることも多いので、ここでは触れず、グロンケ氏のSDの進め方を中心に筆者の気づいたことを述べることにする。

まず参加者が例を出し合う場面で、お

もしろい工夫がなされた。参加者を二人(ないし三人)の小グループに分け、例の「話し手」と「聴き手」(および「観察者」)の役割を持たせ、交互に出し合った例の一つを選んでグループ全体に示し、それをまた一つに絞るという作業をした。これは、一日SDで時間が限られているため、通常なら一人一人から例を出し合い一つに絞る時間を節約するための方策である。また、話し手/聴き手という役割分担は、患者/医者関係のモデルに相当し、そこで「問題を話す」「問題を聴く」ことの難しさを体験する意味もある、と説明があった。

また例が一つに絞られ、その例を記述す

る場面でも、 Gronke氏は一定の枠組みを用いた。つまり、あらかじめ例の構造を、

1. 行為の前の状況 (situation before action/reaction)
2. 行為 (action/reaction)
3. その行為に対する自分の判断 (judgement)

の三つに分解して記述するのである。筆者の知っている限りでのSDでは、こうした例の分解的な記述は、記述が終了後でグループの議論の中で(グループが例をより構造的に理解するために)行なわれる場合はあっても、あらかじめ指定されることはなかった。今回のような例の記述の仕方は、なるほど例の構造をあらかじめはっきりしたかたちで把握することはできるが、他方で例の提供者の「語り narrative」に関する豊かな側面を切り落としているように感じられた。

さらに、例の提供者が「判断」を明確にした後、「なぜ提供者はそのような判断に至ったのか」、判断の前提となる規則や原則をグループ全体で探索する作業となる。ここでも、参加者が多くの「問い」を出し合って一つに絞り、それに答えていくといった通常のSDの作業は省略されている。このSDが行なわれる前の講演の際(9月5日)にもGronke氏は、SDにおける参加者同士の「論拠づけ argumentation」の作業を強調していた。今回のSDでも、この作業をあまり回り道をせずに直接参加者に

行なわせてみよう、という意図があったと思える。

今回のSDは、すべて(参加者にとってもファシリテータであるGronke氏自身にとっても不馴れな)英語で行なわれたこともあって、また一日という時間的な制約もあって、十分な議論はできなかった感じが否めない。SD終了後の参加者の感想でも「型にはめられた」感じがするというものがあった。しかし他方、別の参加者からは「参加者自身の考えの根拠を厳しく問われる」ような実りある対話を経験できた、という声もあった。また「短時間でも議論の中身を精錬させていく」ことはできた、十分議論ができなかったのは、参加者の態度(意見や疑問をその場で発言しなかったことなど)に起因する部分も多々あったという反省も出された。全般的に見て今回のSDは、Gronke氏が考える「論拠づけを指向するSD」をできるだけ簡潔に行なってみる、という一つのデモンストレーションの意味合いが強かったのではないかと思う。

(ほりえつよし)

ホルストと対話者たち

